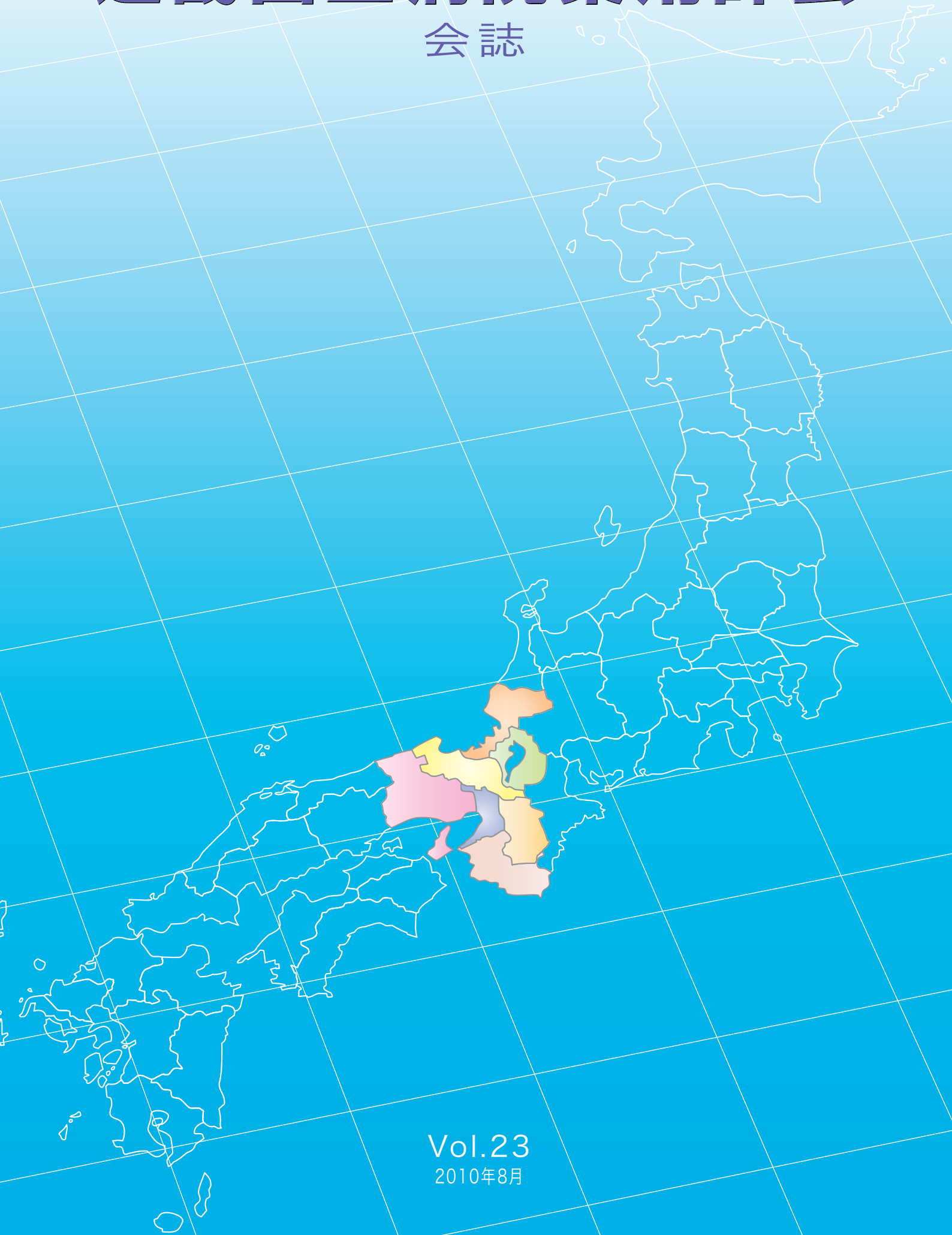
近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.23
2010年8月

目　　次

提言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
南和歌山医療センター　　山﨑　邦夫

薬剤科紹介　刀根山病院　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
刀根山病院　　玉田　太志

教育研修委員会主催講演会報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
舞鶴医療センター　　覚野　律

がん薬物療法における薬薬連携の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
京都医療センター　　畝佳子

編集後記　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

提　言

－「はた・らく（傍楽）」ということ－

南和歌山医療センター　薬剤科長　山﨑邦夫

平成 22 年度診療報酬改定において、感染防止対策、栄養サポートチーム、外来化学療法加算等の要件に薬剤師の配置が明記され、薬剤師の果たすべき役割が更にアップした。また、今回の改訂では見送りとなったが、中央社会保険医療協議会（中医協）に出席する診療側は、次回診療報酬改定に向けた検討課題として、薬剤師の病棟配置評価についての提案書を提出した。

さらに、厚労省医政局長より発出された文書においては「医療の質の向上及び医療安全の確保の観点から、チーム医療において薬剤の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加することが、医療安全の観点から非常に有益」であり、更に「医療スタッフ間の連携・補完を一層進めることが重要」と述べられている。

このように薬剤師の求められる業務が以前にも増してきた今日、日々の多忙な業務に忙殺されることなく、より効率的に業務をこなし、有限の時間を有効に使うことが必要と考える。経営学者であるＰ・Ｆ・ドラッガーは、著書の中で「成果をあげる者は、時間が制約要因であることを知っている。成果の限界を規定するものは、もっとも欠乏した資源である。それが時間である。」と述べている。時間を作ることは容易ではない。単に与えられた仕事をこなしているだけでは、決して時間は生み出せないし、新たな業務をこなすこともできない。業務に優先順位をつけ、且つ無駄を省き、有効な時間を生み出さなければならない。成果をあげるためには、互いに協調し、健全なコミュニケーションを形成し、チーム力を高めることが不可欠と考える。

既に、チーム力・コミュニケーションの大切さについて提言された薬剤部科長もおられるが、私は、チーム力を高め、良いコミュニケーションを保つキーワードは、「*はたらく*」気持ちだと考えている。「仕事」とは、しなくてはならないこと、収入を得るための勤めとある。また、「勤め」とはその人の役目として当然果たさなくてはならない事柄、任務、義務と定義されている。与えられた仕事を確実にこなすことは当然であるが、一歩進んで謙虚な気持ちで仕事に取り組むことが「はたらく」ことと解釈したい。

「はたらく」とは、すなわち「人＋動＝**働く**」・・・個々が動き、能動的に働くことにより、互いに良い影響を及ぼしあえるものと考える。

さらに「*傍楽*＝傍を楽にする」気持ちを大切に行動すれば、おのずとコミュニケーションも強化され、チーム力も一気に高まる。結果として、成果をあげることができ、ひいては自分自身を高めることに繋がっていくと確信している。

薬剤科紹介

独立行政法人
国立病院機構
National Hospital Organization

刀根山病院

〈環境〉

９０有余年の伝統に培われた刀根山病院は、眼下に大阪市街を望む小高い刀根山（豊中市）に位置しています。8 万平方メートルに及ぶ広大な敷地の豊かな自然に恵まれている一方で、阪急宝塚線、大阪モノレール蛍池駅より徒歩 5 分、あるいは大阪国際空港からも 15 分と交通至便な施設となっています。

〈概況〉

当院は、肺結核・肺がんなどの呼吸器疾患や筋ジストロフィーを主とする神経・筋疾患を中心に幅広い先端医療を提供しており、呼吸器疾患専門医療施設、神経・筋疾患専門医療施設、結核拠点病院、エイズ拠点病院、理学療法施設、レジデント研修施設として診断と治療・心身両面からのケア・在宅療養へ向けて充実を図り「点の医療から面の医療へ」の実現に取り組んでいます。そして病院の基本理念として「生命を大切に、人権を尊重し、社会から信頼される最良、最適の医療を目指します」を掲げ、各部門は理念に基づいて日々の業務を行っております。

〈薬剤科について〉

薬剤科のメンバーは科長、副薬剤科長、主任４名、常勤薬剤師５名で構成されています。平成 22 年度の薬剤科の目標として「院内で使用されるすべての医薬品の適正使用の推進とすべての入院患者さんに対する服薬指導の実施」を目標に掲げ、病院経営と診療への貢献あるいは調剤過誤の防止、教育・研修の充実、臨床研究の充実など、薬剤科スタッフ一人一人が意欲と充実感を持ち、楽しく仕事ができるよう努めています。

〈薬剤科スタッフ紹介〉

中多薬剤科長
薬事専門職との兼務で超多忙な日々の連続です

廣畑副薬剤科長
赴任早々電子カルテ導入準備で大忙しです

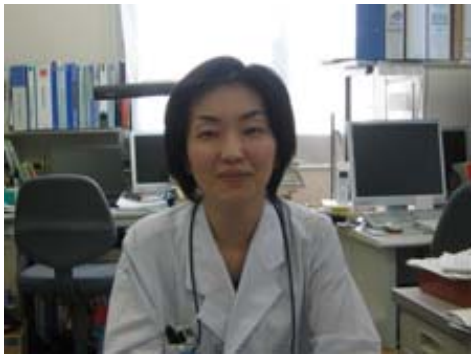
鈴木調剤主任
調剤室、薬剤管理指導などの要の人物です

粉川製剤主任
薬剤科からの医薬品情報発信の中心です

川端薬務主任
がん、ICT などの専門分野を幅広く活動中です

梨薬剤師
緩和医療のスペシャリストとして邁進中です

須山薬剤師
ママさん指導薬剤師として奮闘中です



上野薬剤師
認定 CRC として院内を駆け回っています

竹中薬剤師
NST、簡易懸濁法の中心者として活躍中です

堀尾薬剤師
4 月からの新参者ですが宜しくお願いします

玉田治験主任
刀根山病院一筋 17 年目に突入です

なお、当薬剤科では平成 23 年 7 月新病棟完成に伴う電子カルテ、オーダリング導入に向けシステムの構築中である。

（文責　玉田　太志）
次回は兵庫中央病院

教育研修委員会主催講演会報告

舞鶴医療センター　　覚野　律

テーマ：長期実務実習が始まって
日時：平成２２年６月１９日（土）　１３時～１７時
場所：薬業年金会館
参加人数：近畿国立病院薬剤師会会員　　１０５名
　　：近畿国立病院薬剤師会会員以外　１６名

講演Ⅰ：演題　薬学６年制教育で実施された教育プログラムの紹介
　　講師　病院・薬局実務実習近畿地区調整機構事務局長　西野　隆雄先生
　　摂南大学薬学部病態医科学教授　河野　武幸先生

まず、西野先生より薬学６年制教育プログラムの２０１０年度病院・薬局実務実習の現状として、薬学教育モデル・コアカリキュラムの内容および２０１０年度近畿地区病院実務実習の実施状況と問題点について説明頂いた。続いて河野先生より、摂南大学における病院実務実習にむけての学生教育として、臨床薬学演習、リスクマネージメントやセルフメディケーションの実践から、１年時の病院早期実習、ハンデキャップ体験実習、専門教育連携実習、看護学生との連携実習、トリアージ訓練、健康フォーラムへの参画等まで、学年毎に多岐にわたるカリキュラムが取り入れられていることが紹介された。

この後、滋賀病院の堀内保直先生を司会に、講師の西野・河野両先生に本年５月より病院実務実習学生を受け入れている施設代表として、大阪医療センター早川直樹先生、刀根山病院鈴木晴久先生、兵庫青野原病院岸本歩先生を加え、病院実務実習の現状と受け入れ施設側の感想等についてディスカッションが行われた。現在、大阪医療センター４名、刀根山病院３名、兵庫青野原病院１名の学生がそれぞれ受け入れられており、５週間が経過、各施設ともカリキュラムに違いはあるが概ね順調に実施されていることが報告された。また、実習学生の能力については、プレゼンテーション力、処方解析力等に優れており、大学での事前実習の成果が伺われる反面、処方の力価計算、手書きカルテの見方等事前実習外の事項については対応しきれない傾向にあることが受け入れ施設側の共通した感想として挙げられた。

講演Ⅱ：演題　学生へのハラスメント対策
　　講師　２１世紀職業財団京都事務所　吉見　弓子先生

学生を受け入れるにあたり留意すべきハラスメント問題について、ハラスメントの種類、起こる原因・背景、近年急増する現状と予防にむけての対応策等について講演頂いた。

最初に参加者全員に対して認識度チェックシートを用いてハラスメントに対する意識調査が行われた。その結果、個人個人でハラスメントに対する意識に相違があることを実感することができた。その後、指導者として自身の言動に注意すること、ハラスメントやその兆候を見かけた時は積極的に対応しなければならないこと、相談を受けた時は受け止める事が必要であること等、具体的な内容について説明頂いた。個人的には「まずは挨拶から・・」を実践し職員間のコミュニケーションの円滑化が図られている施設では、パワハラが起こりにくく、かつ職場が活性化しているとの先生の体験談が印象的で、早速職場で意識的に実践するよう心掛けている。

がん薬物療法における薬薬連携の取り組み

京都医療センター　　畝佳子

近年、がん薬物療法は様々な要因を反映して通院主体にシフトしてきた。内服抗がん薬、医療用麻薬の選択肢も拡がっている。これらは、患者にとって普段通りに近い生活を送りながら治療を受けることができるというメリットがある反面、医薬品の使用方法や副作用についての自己管理が必要とされ、医療スタッフによるきめ細やかなマネジメントを受けにくいというデメリットがある。当院でも、外来で抗がん薬、医療用麻薬を使用するケースについては、院内薬剤師の関与が難しい状況にある。この問題点に対する解決法を探るため、昨年度より薬薬連携の取り組みを開始した。

まずは、1990 年代前半まで院外処方箋発行に向けて実施していた地域薬剤師会との合同月例勉強会を見直し、2009 年 9 月より『がん薬物療法』にテーマを限定して試行的に再開することにした。内服抗がん薬、医療用麻薬など通院治療で処方される頻度の高い薬剤の中から毎月テーマとなる薬剤を決めて、①医薬品情報勉強会、②症例検討、③情報交換およびディスカッション、の 3 本立てで構成している。この月例勉強会は今月で第 12 回目となり 1 年が経過するが、まずは地域保険調剤薬局との定期的な話し合いの場、また顔の見える関係作りの場として効果的であり、今後も継続する方向で検討中である。これまで、このような場を持たないままに長期間経過しており、その間にがん医療を取り巻く環境も大きく変遷している。

月例勉強会のディスカッションでは、予想通り保険薬局側の抱える様々な問題点が提起された。その中でも、薬薬連携を進める上で最初に取り組むべき大きな障壁は『告知』『治療内容』などの情報不足の問題であると考えられた。告知有無、治療内容の確認は病院薬剤師であれば、患者面談前に必ず確認すべき事項である。この確認なしにきめ細やかな薬剤管理指導を実施するのは知識以前の難題である。

保険調剤薬局での情報不足の根本的、網羅的な解決は、病院全体で取り組んでいかねばならない大きな課題であるが、現状において薬剤師がすぐに対応できることとしてお薬手帳を介した情報提供がある。医師・看護師などの院内スタッフと情報共有可能な我々病院薬剤師が、最低限必要と思われる告知情報や治療内容を記載したお薬手帳を交付し、患者がこのことに同意の上でお薬手帳を呈示すれば、地域保険調剤薬局での調剤、服薬指導の一助になるのではないか？そして、それが最終的には通院でがん薬物療法を受ける患者のメリットにつながるのではないか？そんな思いで、現在お薬手帳を介した情報共有について地域保険調剤薬局との協働を進めている。

編集後記

★2010 年の流行語大賞の候補となるかも知れない「耐性菌アシネトバクター」による院内感染が国内で確認されました。もともとアシネトバクターはイラク戦争などの帰還兵から欧米に広がったと見られており、国内にはいない種類のものです。今回の感染ルートが海外からでないとすれば、すでに国内に定着しているかもしれません。私たち薬剤師は抗生物質の適正使用を今後ますます推し進めていかなければなりません。

★厚生労働省は医療機関で処方された向精神薬を大量に飲んで自殺を図る人が増えている問題で、その対策の１つとして、医師の過剰な処方について薬剤師が照会・助言を積極的に行うように日本薬剤師会に要請しました。また薬の乱用目的で医療機関を重複受診する患者についても、薬剤師と医師の連携した対応を進めるとしています。今後ますます薬剤師の活用が推し進められると思います。

★「総コレステロール値または LDL(悪玉)コレステロール値が高いほうが総死亡率が低い」とする研究成果が日本脂質栄養学会で報告されました。動脈硬化の原因の一つとされるコレステロールについて、日本では血中の LDL コレステロール値が 140mg 以上で高脂血症と診断され、多くの医療現場で基準値となっています。ところが調査の結果では、男性では LDL コレステロール値が 79 以下の人よりも 100-159 の人の方が死亡率が低く、女性ではどのレベルでも差がないとの結果を得たというものです。安心された方も多いのでは？さて皆さんはどちらを支持しますか。

★今年は異常なほどの猛暑が 9 月の声を聞いても続いていますが、皆さん体調にだけは注意してお過ごしください。今月号の薬剤科紹介では、夏バテを感じさせない一人ひとりの元気な顔写真を掲載してみました。その他研修会報告など、最後まで御熟読ください。

（H.T）

近畿国立病院薬剤師会会誌　　第二十三号　平成 22 年 8 月発行
発行元　近畿国立病院薬剤師会事務局　　大阪市中央区法円坂 2-1-14
（独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内）

発行人　会長　小森　勝也（大阪医療）

編集　広報担当理事　山﨑　邦夫（南和歌山）
広報委員　石塚　正行（大阪南）　中西　彩子（大阪南医療）
廣畑　和弘（刀根山）　奥田　直之（大阪医療）
本田　富得（神戸医療）　東　さやか（大阪医療）
宮部　貴識（近畿中央）　玉田　太志（刀根山）

近畿国立病院薬剤師会ホームページ　http://www.kinki-snhp.jp/